《修士論文要旨》

縄文時代晩期中葉における近畿地方と北陸地方の無文深鉢の広域的検討

小　池　悠　介*

縄文時代晩期は、全体で草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の６期に区分される縄文時代の終末期に位置づけられ、約3000年前である。縄文土器は様々な文様を持つ土器型式が多い。またその文様の変遷を用いて編年を行う土器型式も多く存在する。

しかし卒業論文でも研究対象とした近畿地方縄文時代晩期中葉に位置づけられる篠原式は無文化が進み、深鉢は一部で頸部に刺突文を残すがそのほとんどの土器が二枚貝条痕・ケズリ・ナデで調整が行われ、編年も文様ではなく、調整手法と口唇部の刻みの有無によって行われてきた。

また北陸地方では縄文時代晩期中葉に位置づけられる御経塚式・中屋式の深鉢は文様が残っており、編年の対象も文様のある土器が中心となって行われている。しかし、無文深鉢も多く存在する。その無文深鉢は近畿地方の篠原式深鉢との器形や調整手法で類似点が多く、近畿地方・北陸地方それぞれの無文深鉢を検討する事によって、より広域的な土器の検討を行う事ができると考えた。

検討対象とした遺跡は以下の通りである。近畿地方は篠原中町遺跡・佃遺跡・森ノ宮遺跡・恩智遺跡・錦織南遺跡・上里遺跡・橿原遺跡・観音寺本馬遺跡・滋賀里遺跡・六反田遺跡・弘部野遺跡・金合丸遺跡・糞置遺跡・中屋遺跡・中屋サワ遺跡・御経塚遺跡・桜町遺跡である。

近畿地方篠原式の深鉢の変遷としては、

古段階では、器形ではＡタイプ・Ｂタイプが隆盛する。また一部滋賀里Ⅲa式を因襲した頸部にナデ調整の痕の残るものも存在する。調整手法では、主に二枚貝調整が主流であり、ケズリ調整も存在する。中段階でもＡタイプは存在するがその量は減少し、Ｂタイプの割合がＡタイプを上回る。Ｃタイプが出現し、また地域によってはＤタイプのものも少量出現する。調整手法では、口唇部の刻み調整が出現する。また二枚貝調整が減少し、ケズリ調整・ナデ調整が主流をなし始める。新段階になると、Ａタイプは消滅する。Ｂタイプも残るものの、その主流はＤタイプになり、特にＤタイプが隆盛する。調整手法も二枚貝調整は消滅し、ケズリ調整とナデ調整となり、その中でもナデ調整が主となる。

平成25年度　*文学研究科文化財史料学専攻

北陸地方では、縄文時代晩期中葉の無文深鉢は、器形では近畿地方では１～２割程度であった砲弾型を呈するE類が比較的多く出土する傾向が見て取れる。また屈曲を持つ深鉢も全体的にＢ類の割合が高くなっている。文様を持つ精製土器では頸部の屈曲部を境目にして文様を組まれるものが多いため器形としてはしっかりとした屈曲を持つＡ類やＢ類の割合が高くなっている。

金合丸遺跡ではＦ類の割合が高く、この器形は北陸地方の他の遺跡では見られないもので、この地域における独特な器形であると考えられる。

口唇部の刻み目は、桜町遺跡では、88.9%と最も割合が高くなっており、いずれの遺跡も近畿地方に比べると割合が高くなっている。

調整手法では、近畿地方に比べるとバリエーションが少なく条痕とナデの二極であった。そのなかでも条痕を施すものが圧倒的に多く、中屋遺跡・中屋サワ遺跡・御経塚遺跡では約８割、桜町遺跡でも約６割が条痕を施すものであった。福井県の金合丸遺跡と糞置遺跡では条痕とナデの割合がほぼ半分ずつであり、石川県や富山県の遺跡に比べると若干ナデの割合が高くなっており独自の地域色を示している。